

英検

英語情報

2019
創刊号

2019年11月15日発行 通巻135号

英語教育の"今"を知る。明日からの授業が変わる。

どうする？



小学校英語

いよいよ始まる
新しい授業に向けて
疑問を解決！

早期化・教科化にどのように対応すべきか？

第19回 小学校英語教育学会 (JES) 北海道大会より

「主体的・対話的で深い学び」
を実現する授業づくり

今日から始めるオビカツ

夏休み課題を変えたら、
生徒の学びが変わった
新潟県立新発田高等学校の挑戦

教員の自主研修 大分県編

地域で発足した自主研修の輪を県全域に広げ
より良い授業づくりを考える場に

変わる 大学の教職課程

明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター

明海大学 副学長
教職課程センター長
地域学校教育センター長
外国語学部長
高野 敬三 教授

METTS Commons

程センター・地域学校教育センター
Teacher Training Support Commons

変わる 大学の教職課程

【第1回】

明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター

児童生徒に寄り添うことのできる “心ある教員”を育てたい

明海大学では、2016年4月に発足した教職課程センターと地域学校教育センターが一体となって、教員たちが教職を目指す学生と密接に関わり、その成長を見守ってきた。センターの教員たちは、一人一人の学びの可能性を信じ、英語を通して学生たちと喜怒哀楽をともに味わいながら、自身が中学校や高等学校、教育委員会などで積み重ねてきた経験を語り、示している。児童生徒に寄り添うことのできる“心ある教員”を育てたい。センターの教員たちの共通する思いはただ一つだ。

教職課程センターと地域学校教育センターで支える体制

「明海大学の教職課程を充実してほしい」との命を受けて、高野敬三副学長が明海大学に着任したのは、2015年4月のこと（教職課程センター長・地域学校教育センター長・外国語学部長を兼務）。高野副学長は、東京都教育委員会 の要職や東京都教育監として長年にわたって小・中・高等学校の英語教育に携わってきた経験から、英語科教員を目指す学生を掘り起こし、英語の授業を通して人間教育を行うとともに、大学の持つ教育研究の成果を活用して、地域の教育に貢献することが必要であると考えた。そこで2016年4月、教職を目指す学生が学年や学科の枠を超えて集い、教員と近い関係のなかで指導を受けることのできる「教職課程センター」と、教職課程で学ぶ学生たちが地域に出て実際に学びを実践する場をつくり、大学の教育資源を地域に還元する「地域学校教育センター」を設置した。

「全国に800もの大学があるなかで、教職課程を持つ大学は600にも上りません。明海大学で教職課程を充実させるためには、他の大学にはない独自性が求められ、それが、英語を通して子供たちに寄り添うことのできる“心ある教員”を育てることだと言えます。また、コインの裏表のように、教職課程センターと地域学校教育センターが一体となって機能し、学生が大学で学んだことを、地域の小・中・高等学校での学習支援や大人向けの英語講座等で実践し、地域で

の体験を大学に持ち帰ってさらに学びを深めていく教育が必要であると考えています」と高野副学長は語る。

そして、2017年には文部科学省が英語教員の英語力・指導力強化のため、教職課程における「教職課程コアカリキュラム」「外国語（英語）コアカリキュラム」を打ち出したことに伴い、明海大学でも大学独自の科目を設置し、教育の質向上を目指した。

学生が集い、教員が寄り添う 学びの空間

教職課程センター・地域学校教育センター（通称METTS Commons：Meikai Teacher Training Support Commons）には、朝から夜まで常時、教職課程を履修する学生たちが集い、ともに学び合う。施設内ではタブレットPCやプロジェクターを使用したグループワークができ、ガラス張りのFaculty Officeには教職課程の教員たちが常駐する。学生たちは自学自習やプレゼンテーションの練習などグループワークをするほか、学修や進路の悩みについていつでも教員に相談することができ、指導を受けることができる。教員たちも一人一人の学びの可能性を信じて、時間を惜しまず学生たちに寄り添う。千葉県や東京都の中学・高等学校での教員経験を持つセンターの教員たちは、自身の長年の経験に基づく実践的な指導技術を授業で示すほか、METTS Commons



写真左から、教職課程を履修する神谷さん、平原さん、本間さん（いずれも3年生）

に集う学生たちからの相談に対して、より具体的なアドバイスや提案ができるという強みがある。

実際に利用する学生に聞いてみると、平原豪さん（3年生）は「私が英語科教員を目指したのは、他人から存在価値を認められるような仕事をしたいからです。METTS Commonsは教職履修の学生だけに開かれた空間で、無料で使用できる教科書や参考書もあり、いつでも先生方に相談できるのがうれしいです」と話す。地域にボランティアで学習支援などに行っている本間大地さん（3年生）は「実際に自分が教師になったらどのように教えればよいのかを考えるきっかけになり、貴重な経験ができています」と喜ぶ。神谷美麗さん（3年生）は「英語が苦手だった私を、トップクラスになるまで引き上げてくださった高校の時の英語の先生のようにになりたい」と教職課程を履修した。今年2月には本物の英語に触れたいと、オーストラリアの大学で英語研修を受講し、「大学にはMETTS Commonsをはじめ、海外研修やネイティブの先生による英語の授業などの環境も整っているので、大いに活用したい」と話した。

METTS Commonsでは教職課程を履修する学生たちが学び合い、教員たちの親身な指導を受けられる

豊富な現場経験を生かした実践的な指導

千葉県の公立高等学校で技能統合型の授業やパフォーマンス評価などに長年取り組んできた百瀬美帆准教授は、豊富な実践経験を生かし、学生たちが授業づくりでつまずきがちなポイントを見極めた指導を行っている。担当している科目は、1、2年生の「教職基礎セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」、3年生の「教科教育法Ⅰ～Ⅳ」、4年生の「教育実習Ⅰ・Ⅱ」だ。百瀬准教授は、学生たちが将来、教員になったときにどのような授業をすべきかを理解させるため、1、2年生の「教職基礎セミナー」で、まず自身が実践してきた授業を再現してみせる。学生には学習者として授業を体験させ、ディベートやアクティブ・ラーニング、プレゼンテーションなどの活動を取り入れた授業を

提示する。「1、2年生での実体験に基づく感覚を持って、学問としての『教科教育法』を捉えられることが、本学の教職課程の強みです」と話した。

取材に訪れた日は、「教科教育法」の授業で、3年生が初めて模擬授業を行った。Small Talkで扱うトピックを、前時で学んだ内容や本時の目標表現とどのように関連付け、どのような英語で語りかけるのか。模擬授業を行う学生は百瀬准教授と話しながら入念に準備を重ね、指導案を作成してきた。

『先生が素直な自分の気持ちを語れば、生徒たちはついてくるのよ』と伝えたら、『授業ってそれでいいんですね』と驚いていました。文法訳読型の授業しか受けておらず、先生が自分のことを語るような場面に遭遇したことがなかったのでしょう。学生たちは新学習指導要領に基づいた授業を行うことになりました。だからこそ、生徒に何を学ばせたいのか、何を引き出したいのかを意識した指導計画を立てていくことが重要なのです」と述べた。

授業中、百瀬准教授は温かなまなざしで学生を見守りながらも、思い描いた授業展開ができずに慌てる学生に対して、教員としての立ち居振る舞い、生徒に語りかけ、指示する英語などを指摘しながら



ら、ほかの学生たちにも指導した。

学生たちはこのような試行錯誤を繰り返し、実践を積んでいく。そして、自身の英語力と授業を進める英語力とのギャップに戸惑いながらも、次第に英語と積極的に向き合うようになる。なかには学科独自の英語研修や、教職課程の学生対象の「オーストラリア奨学研修」に応募する学生もいる。地域学校教育センターが連携する地域でのボランティアに参加し、学んだことを実践する学生も多い。

「ボランティア経験により、学生たちは英語力はもとより人間力が磨かれています。物事を俯瞰して見る力を付けて、大きな成長をしています。本学の学生は自己肯定感や自己有用感が低く、ボランティアを通じて、他者から必要とされて自己有用感を高めています。そうした力は将来、学生たちが教員になったときに大いに役立つことでしょう」と百瀬准教授は、学生たちの成長を喜んでいる。

大学の人的資源・教育資源を地域に還元

1年生の「小学校英語基礎概論Ⅰ・Ⅱ」や2年生の「特別活動論」、4年生の「教職実践演習」を担当する石鍋浩教授は、東京都の公立中学校での英語科教諭や校長経験を生かして、小・中学校の英語教育、生徒指導などを教えている。また、玉川大学との連携協定に基づき、2年前から実施している小学校教員養成特別プログラムの指導も行っている。大学独自設定科目の「小学校英語基礎概論」は、小学校英語の理論や実践を学ぶ場であるが、学生の問題解決能力を高めるため、学生同士でディスカッションするような場面も取り入れ、教員になったときの心構えや子供たちとのやり取りなど、具体的な指導のエッセンスを込めた授業を行う。また、この科目を履修し、小学校で50時間英語の指導をした学生には「小学校英語指導者認定協議会(J-SHINE)」から小学校英語指導者資格が与えられる。昨年度は9名が資格を取得し、卒業した。さらに、地域学校教育センターでは、自身がパイプを持つ東京都足立区や港区をはじめ、千葉県

浦安市、秋田県横手市などとの連携を深め、教員研修を引き受けている。

石鍋教授は「大学として地域のためにできることは、大学の持つ教育資源や人的資源を地域に還元することにあります。そして、私が各地域で見てきたことを他の地域に伝えていくことも地域連携につながるのだと感じています。また、大学には多くの留学生がいますが、彼らも大学にとっては大切な人的資源です。教職課程の学生と留学生が交流を深めることで、国際感覚を養い、グローバルな視点を持つことができ、それは将来、彼らが教員になったときに生かすことができるでしょう」と話す。そして、学生たちには「小・中・高等学校へボランティアで入ったときには、子供たちに向かって、胸を張って『教員を目指している』と伝えてほしい。学生たちが嬉々としてMETTS Commonsを紹介したり、夢を語ったりすることで、さらに教員を目指す人が増えたらうれしいですね」と目を輝かす。

小学校の新学習指導要領実施まで半年を切った。小学校へ研修に訪れる



明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター 石鍋浩 教授

たびに、先生方の努力には頭が下がると石鍋先生は言う。そして、「素晴らしい授業を見たのですが、その先生が『実は英語が苦手で、英語で授業をすることになるなんて思いもせず、異動してきて初めて本格的に授業をしたのです』と言うのです。ほかにも、学校全体で指導案を作るなど、先生同士で学び合っている様子を多く見るようになりました。だからこそ、中学校の先生方にはもっと小学校の現状を知ってもらいたい。小学校の先生ががんばっていらっしゃることを受け継いで、さらに伸ばすような授業をつくっていただきたいと思います」と述べた。

学校で愛される教員をこれからも育てていく

今年度、明海大学では14名が教員採用試験の一次試験に合格した。そのうち11名が中学・高等学校の英語科教員を目指しているという。高野副学長は「教職課程を履修する4年生20名のうち、昨年度の卒業生を含む11名が一次試験に合格するまでに実力を付けることができたことは、教職課程センターの教員たちの親身な指導の成果」だと高く評価する。多くの学生は、中学・高等学校の英語学習でつまずいた経験があり、自己肯定感や自己有用感が低いなかで入学してくるというが、「だからこそ、本学の学生は児童生徒に寄り添った“心ある教育”ができる教員になれると信じてい

ます。学生たちは大学4年間を通じて、英語と悪戦苦闘しながら、必死で学ぶうちに、だんだんと英語が理解できるようになっていきます。そういう経験をした学生だからこそ、子供たちの心やつまずきが分かる教員になれるのではないのでしょうか」と高野副学長は胸を張る。実際のところ、学校現場から聞こえてくる卒業生たちに対する評価は「子供の気持ちに寄り添って指導してくれる」などだという。「学びの可能性を信じて、しっかりと寄り添う教員のもとで自信を付け、教員として巣立っていく学生たちは、愛される教員へと成長しています。これからも、そのような教員を育てていきたい

ですね」。そのためにも高野副学長は、教職課程のあるべき姿を模索し、今後も教職を目指す学生たちが学び、実践を積んでいく「場」づくりに邁進する。そして、教職課程センター・地域学校教育センターの教員たちは、学生たちに寄り添いながら、自身がロールモデルとなり、教員としての理想像を示し続ける。

